F(1) 昭和42年2月24日 国鉄東局特別扱承認新聞紙 第490号
昭和40年3月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）
1969年2月21日 第165号

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

2月21日
週刊
第165号
編集発行人 佐々木和雄
一部 20円
購読料 1部20円 回500円

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2ー7ー6 滝沢ビル内 電話代表 (264) 2961 振替(東京) 28110
大阪支局 大阪市福島区鷺洲本通り1ー16 北村ビル 電話06 (458) 6597
京都支局 京都市左京区下鴨宮崎町128ー29 (075) (701) 0025
名古屋支局 052 (732) 3553

21日／東大日大全共闘報告集会
(午後六時、日比谷公会堂)
23日／東大・日大 全国学園闘争 報告京都集会
(京大・午後六時)
24日／〃 大阪 〃
(阪大松下講堂、午後六時)
25日／〃 神戸 〃
(神大・午後六時)
／自衛隊三軍 演習阻止 全大阪決起集会
(主催・全大阪反戦、大手前公園、午後六時)

地区反戦の再編強化のために

地区反戦、地域共闘をソビエトめざす反帝統一戦線へ

（1）

我々は、10・21闘争→東大を頂点とする学園闘争で形成された日本階級闘争の現局面を持続させ、なおかつ、70年闘争へむけて、4・28沖縄闘争、6月ASPAC闘争、11月日米会談阻止闘争へと一大飛躍させる為に、現在問われている諸課題に応えなければならない。

現在の階級関係の特徴は、10・8闘争が旧来の権力対三派の階級関係を一変させ、権力対三派の攻防を軸に全階級関係を形成させた局面を更にのりこえた地点に到達したことである。9月以降の我が……

……→東大闘争を闘い抜いてきたソヴィエトを展望した反帝統一戦線運動の前進である。既に、10・8闘争が生み出した権力対三派の新たな攻防において、戦闘的左翼内部の小ブル派が権力の総路線に対決する前衛としての包括的指導を欠落し、全学連・地区反戦運動を党派の囲いこみ運動に封じこめようとした極点における破綻としてあった「6・15日比谷事件」の解決を、わが同盟のヘゲモニーの下、革命的原則、即ち、反帝統一戦線の実体化として牽引してきた。2月7日、東京地区反戦世話人会が八ヶ月ぶりに再開され、「6・15問題の解決と今後の地区反戦運動の強化のために」という共同声明……

……らず、砂川闘争で全学連と連帯し直接的に権力との攻防を担うまでに成長した。砂川の闘いは、羽田闘争からエンプラ闘争へと、地区反戦に大量の青年労働者を結集させつつ組織的拡大をかちとっていった。（第一期地区反戦運動）

社民内部では、この全学連の突出した闘いが、市民社会内部に流動をまきおこし、プロレタリアートの中にシンパシーを拡大し、それが地区反戦に結集していくことに恐怖する右派が、いちはやく主要敵＝全学連排除にたちむかいつつ、全学連と反戦派をきりはなすをえなかったのである。

一方、全国反戦の指導部にある構改左派は十月闘争以来協会派に対抗しつつ、一月社会党大会で確定された「日本における社会主義への道と一九七〇年闘争」と題する「中期路線」に依拠し、解放派をまきこみつつ、独自の反戦闘争を展開せんとした。しかし、この路線も6・15日比谷事件による破綻、10・21の爆発が生み出した新たな情況での岩井発言、太田派の擡頭に孤立せざるをえなかったのである。

1・22付「社会新報」の社会党……

（2）

（3）

（4）

（5）

6・15問題の解決と今後の地区反戦運動の強化のために
東京地区反戦連絡会議世話人会共同声明

入試阻止から安保拠点へ

13～14日、本部逆封鎖を粉砕

全学封鎖—全共闘運動の形成で 京大

卒試—入試実力阻止へ 中大

当局民青のスト収拾策動を粉砕

東大内市民的秩序派の解体へ

全共闘、全国で報告集会開催

第五別館屋上の35名の戦士と、連帯して闘う学生

東大に呼応する 関学大入試粉砕闘争

阪大本部も封鎖

スト・バリケード各地に波及

全国学園共闘形成へ

日大全共闘、反撃の烽火

共産主義 第12号

主な内容
■当面する情勢と同盟の任務（第四回中央委員会議案報告）■八月国際反戦集会の総括■日本帝国主義と70年安保■全学連運動の任務は何か■チェコ問題と国際共産主義運動■アメリカ資本主義の危機の諸特徴■フランス五月革命の教訓

発売中
（三〇〇円 〒70円）

69春闘の位置と我々の任務　その3

レ・パと合理化の一体化はねのけ安保・中央権力－拠点ストへ

共産主義者同盟労対部

▼70年代展望の階級攻防▲

われわれは70年から70年代を通して、旧来の右派労働運動による組合主義左派の解体から、革命的左翼による左右社民解体を死活の任務とする問題を、一連の反戦青年委レッドパージ・新興・東京書院への日経連－官権の介入、なかんずく国鉄五万～十六・五万人合理化、東鉄局三分割案、一連の左派活動家への首切処分といった敵階級の攻撃の性格の中に見ることができるのである。基幹産業に立ち遅れた社会的資本の合理化のなかでも、全逓と共に合理化が最も遅れているが故に、同時に左派社民－下部戦闘的層を70年～70年代に備え権力支配のもとに置くことにその攻防の性格があり、国鉄民同の危機－青年活動家の戦闘化と離反の中で、革命的労働者の任務の重大さが問われているのである。

何故なら、70年～70年代へむけた資本家階級は、第一に、勃興帝国主義として世界で唯一経済発展をとげつつも、世界的不況－ドル・ポンド危機への展望と、第二に、危機の部分的統制経済への移行を総合予算主義という方式を採用してめざしつつも、その環を握る所得政策－食管制を未だ実行できないでいる（宮沢は70年以降実行するといっている）、第三に、安保－沖縄をめぐる派兵準備と、労働者・人民の動揺に対処しなくてはならない、という必死の任務をはっきりと自覚しているからである。

すなわち70年～70年代を通し、従来の配転を軸とした合理化攻撃が、相対的にビルト部門に吸収し得た段階から、それが不可能となりつつあるという経済過程と大衆の行政整理、レッドパージを、政治・経済闘争の攻防渦中に不可避とせざるを得ないという、階級攻防の性格を見通しているのである。国鉄合理化攻撃は、かかる全逓合理化、定数－定員制下での公務員攻撃を初めとし、民間にも波及するであろう内容を、合理化が最も遅れたが故に、70年代にさしかかりかかる性格を付与されているといわねばならない。この七〇年代へむけた攻撃の旧来の合理化からの質的飛躍は同時に、同盟の安保秩序宣言－反戦青年委対策、三菱重工における思想別組合の新たな意味として、今、右派労働運動の質をも変えつつあるのだ。

このような敵階級の攻撃は、革命的左翼の任務を重大なものとすると同時に、自らの実力闘争をもって敵階級の攻撃を打砕きつつ、左右社民を解体すべき情勢が近づきつつあること、その闘いを一方においては産業別的波及、他方においては拠点実力闘争防衛の地域共闘と闘いの地域的波及、地域的結合－政治闘争の結合として、闘いぬかなければならないという課題を背負っていることを示している。われわれは、中央権力闘争－マッセンストを計画しつつ、それが主体的にはこの拠点実力闘争－地域共闘の中にのみ現存することを見極めなくてはならない。同時に革命的左翼の現在の力量が一部を除いていま直ちにかかる拠点実力闘争を闘いぬく力量を持ち得ないという段階で、その準備に向けてわれわれが闘い続けている中小争議、官公労職場闘争、民間少数派運動、地域共闘、安保拠点スト等反帝労働運動の現在的水準を明確にしてゆかねばならないのである。

それは当然にも50年代労働運動三池－三鉱連を頂点とする"戦闘的労働運動"の総括と、今革命的左翼の間ですら夢想されている「戦闘的労働組合の再生」～「職場自主管理論」への批判でもある。

▼三池・東交左派敗北越えて▲

いうまでもなく、前号でも触れたように、職場闘争なり、大衆と結合なり、反合闘争なりがそれ自体としては存在し得ない。48～49年に於ける職場管理－地域人民権力－産業防衛－国益人民管理というサンデイカリックな体系、高野の地域ぐるみ～MSA下労働運動－平和経済国民会議等、生産点の闘争は、労働運動の方向性と権力問題の解答を同時に要求しているからである。権力問題を捨象しこの点より三池の職場闘争を見るならば、いわゆる独走体制－拠点闘争を三鉱連の経営方針変革闘争－企業連を統制下においた炭労の産業別統一という路線の下に統一したものである、ということができる。そして三鉱連の経営方針変革闘争は労働組合運動の内包的発展としては最高の水準を行くものであった。その内容は一一三日の闘争の力量を逆に生産－労務計画と会社の無補充方針を撤回させ、組合要求による停年退職者及び病弱者の子弟との交替採用、臨時夫組合夫の本採用への切替、従業員子弟の採用など、労働時間－賃金から雇用－人員確保－補充という労働組合機能としては労働組合の枠をはみ出す迄の力量をその職場闘争を基礎にかちとり、炭労の長期計画闘争として波及させたのである。が同時にそれが高野から太田への転換の推進者であったことに見られる限界は、二つの方向からそれを分解に追いやったのである。

その第一は、いうまでもなく資本の不退転の決意が指名解雇、権力の投入に到り、占拠にまで突き進み、労働組合の枠をつき破ることを要求された時、三鉱連は脱落し、三池もまた「再びの日」を夢見て第二次あっせん案、総評、炭労の調停を疑いもなく受入れ、権力との対決から召還したことである。第二は、三鉱連－三池の反合闘争が企業整備雇用を基軸としてあったのに対し、55年以降の合理化攻撃が国際競争にむけた大規模な配転を主軸としたものとして基幹産業を襲っていること。このような攻撃に対して、労働者の自然発生性に屈しつつ資本との一定の妥協を前提とした労働組合運動の内包的発展を長期路線化する右派労働組合運動が、攻撃の国際的規模と非和解性の前に経営協議会化し、解体する中で、三池－三鉱連の左派労働組合運動が孤立せざるを得なかったことである。

このスクラップ部門における首切、基幹部門における配転を、生産過程における必然性＝労働過程－労働組織の資本による専制支配、労務支配－職制の完全な従属化と、それを日本帝国主義の国際的生存条件として非妥協的にかけてくる攻撃に対して、左派労働組合主義の敗北が不可避なのはいうまでもない。なぜならプロレタリア国際主義－政治闘争を捨象すれば、職場の闘いを労働組合機能の強化としてではなく、ソビエトをめざす闘いへ展望すること（勿論それは一時的な敗北は不可避である）あるいは自らの闘いを労働組合機能が要求する個々の改良的成果にでなく、資本との闘争でのもの永続性の中に位置づける（だから政治的統一戦線、党との結合が不可避である）ことが要求されるからである（三菱長船第一の昨春のストはかか観点よりなされた）。個々の改良的成果の連続性にその基盤を持つ既存の労働運動組合的団結は、かかる資本の非妥協性の前に、資本との協調による利潤の分け前をうけることを前提とする長期計画＝事前協議制－中央交渉－労働組合の経営協議化を不可避とするのである。

プロフィンテイルン、平和時の分裂、戦闘的第二組合はこの脈絡においてとらえられてゆかねばならない。66年復活、侵略に向かう日本帝国主義の下での労働運動がこの左派労働組合主義解体の第一段階で、基本的には三菱長崎、大阪中電－革命的左翼と右派＝帝国主義労働運動の攻防へと移行したのはこのことを意味している。

日韓会談を前後しての三菱平和時の分裂と「第二」の旗の堅持の革命的意味はこのことを明瞭に示している。東交闘争が、基幹産業の平和時の分裂に対し、スクラップ部門における実質的首切りを含む配転、合理化であり、争議として展開される前段階で、解放派が東交民同との決定的対決から、二重処分に対し、第二組合をも決意しつつ独自の拠点実力闘争へ最後まで踏みきれなかった（67・2・24三輪の闘いは勿論遅すぎたのである。問題もこの帝国主義攻撃の性格と党派闘争への無理解、労農派マルクス主義への幻想にあることはいうまでもない。政治闘争、地域共闘の問題、したがって解放派の「反合発射台論」への批判は後に譲る。）

（以下、本面の他の記事は判読範囲外のため一部のみ）

春闘・地域共闘・安保拠点スト

京大、阪大、神大、大市大を拠点に三月入試阻止　全関西のコンミューン運動を牽引

社会主義学生同盟関西地方委員会

東大、日大の闘いを受けつぎ、発展させる闘いが全国でまき起っている。とりわけ、関学大の闘いを突破口とした関西における闘いは爆発的局面をかちとり、入試阻止へ驀進している。これらの闘いの一切を統一的に指導している社学同関西地方委からの報告を掲載する。

（一）はじめに

関西における学園闘争は1・18～19安田神田闘争以降、関西全域にわたって急激に拡大し激化している。その闘いは、京大、阪大、神戸大、立命大、関学大等の封鎖闘争として、あるいは京都府立医大、和歌山、大阪学大等の無期限ストライキ闘争として闘われている。

闘いの契機は、寮闘争＝京大、神大、処分反対闘争＝阪大、浪速短大、学園民主化＝近大、京都産大、大阪学大、等と異っていても、闘いは、東大、日大、中大闘争と同様に、帝国主義の侵略・反革命の強化に伴う国内再編との対決として、三月中教審答申による大学の帝国主義的支配体制完成との闘いとして…

闘争の到達点、その質に規定されて闘われているのであり、その質にいかに呼応し、また、越えるのかという一点をめぐって闘われているのである。すべての大衆とすべての政治勢力はこの東大闘争の到達した質に対する対応で現在の関西の学園闘争に対する質の態度をうち出している。

第一に、大学当局と日共＝民青は、京大闘争に典型的な如く、闘いがまだ部分的・改良的段階にある時点においても、すでに予防的反革命として登場している。逆にそのことにより、資本主義の社会的分業の特殊的一環に寄生する小ブルの資本、および権力とわれわれにはさまれた質の存在基盤に対…

もう一つの特質は、無党派急進民主主義派の膨大な登場である。このことは、一面では、帝国主義の全社会的再編によって進行してきた大衆の分解と流動が大学において…

高校生、赤ヘル先頭に七百　紀元節粉砕全都統一行動

【社学同高校生委員会】全国の同志諸君！高校生革命戦士諸君！2・11紀元節粉砕全都高校生統一行動は圧倒的に成功した。全都初の七百名以上の統一集会をかちとり、五百名のヘルメット部隊を登場せしめた。わが同盟は昨年夏から首都の高校生の組織化を始めたばかりだったが、この闘争には八十名の赤ヘルメット部隊を公然と全大衆の前に登場せしめた。東京都の高校生運動は、今や小…

赤ヘル、ゲートを突破　水戸射爆・核燃実力闘争へ

全国の闘う学友諸君へ

東大・日大闘争－全国学園闘争の報告集会を訴える

小樽で社学同勝利！　全道の闘う戦列の拠点に

【小樽商大分局】東日大闘争を、また沖縄…